

伊地知鐵男校

連欵論新集

三

古典文庫

古典文庫第一九一冊

昭和三十八年六月二十日 印刷發行 ©

(非売品)

校者 伊知地鐵男

発行者 吉田幸一

集新論歌連
三

東京都板橋区熊野町三四

印刷所 帝都印刷製本株式会社

発行所

東京都(王子局区内)
北区西ヶ原町三ノ三四

古典文庫

電(九一九)二七一七
振替口座東京一四五九七番

伊地知鐵男校

連欵論新集

三

古典文庫

目次

凡例	五
解題	七
一、花能万賀喜	宗 砌 二七
二、老のくりごと	心 敬 三五
三、老のすさび	宗 祇 六二
四、用心抄	二七
五、三好長慶宛書状	宗 養 三九
六、宗養より聞書	宗 養 一五九
七、紹三問答	三 甫 一九二

凡 例

一、宗砌・心敬・宗祇・宗養・三甫の著作のうちから風躰、注釈、執筆作法、故実にわたるもの七篇を選んで「連歌論新集 三」を編した。

一、翻刻にあたって、底本の異体、略字、草仮名等は現行文字に改め、解読の便をおもつて私に句読点、濁点をふしたほかは、宛字、仮名遣、送仮名などは底本のままとした。

一、校訂は、底本の誤脱、誤字と思はれるものは（ ）して本行、あるひは右傍に校異をしるした。その場合、括弧内は他本との校異、括弧のないものは底本の本文である。

一、本書の原稿作成その他に、内閣文庫の木藤久代さんの御助力があつたことをしるして御礼のしるしとする。

解題

花能万賀喜

宗砌

本書は、先賢救済^{二十句}・良阿^{十四句}・周阿^{六句}・梵灯^{三句}のほか、宗砌自身の二句に短評をくはへて各作家の特色を闡明し、中古以来の連歌風躰や付合を教示したものである。

本書には、元来序文と跋文に類する奥書とがあつたと考へられるが、現存写本には間々それらを脱したものもある。即ち続類従本は序文を佚し、早大図書館本には跋文がなく、連歌合集第二集所収本の跋文には一部脱落が考へられる。このうち続類従本と第二集本の跋文は同類のもので左のとほりである。

享徳初の年神無月の比

(ナシ) (和州)

大和国より或少人連歌の道心得侍べきやうを書付て

(筆)

と承程に、草案などにもおよばず、かたはらにみつけ侍る此料紙を取て、

(以下いか)

(括弧は合
集本校異)

(よ)

にぞやマデナシ）
やうにしるし、かの所望にしたがひ侍る、いかにぞや、（享徳三年七月写之

宗砌作也）

みるように、この跋文は撰成当初のものと考へられ、享徳三年云々の文のみは、宗砌記とは断定できないかつ
本集の底本に用ゐた合集第十九集所収本の跋文にも参看して、「花のまがき」の
撰述は享徳元年神無月（十月）の頃、大和の連歌初心者のためのものであることが
考へられる。

本書の底本には、諸本中もつとも誤脱錯簡の少ない連歌合集第十九集所収本を
用ゐ、それに合集第二集、早大図書館の古写本によつて校訂したものである。

〔参考〕花能万賀喜の考察 金子金治郎（昭和十一年十一月第一卷四号「連歌と俳諧」所載）

老のくりごと

心 敬

応仁元年四月、応仁の大乱が萌しはじめた京都をあとにして、武蔵野品川の鈴
木長敏のもとに暫く寄寓してゐたが、文明三年夏、更に奥深い相模大山に隠栖し

た。その経緯をしるし、和歌と連歌の交替をのべ、連歌の変遷・風体等を、主として「さゝめごと」を中心にして摘要したものである。

随つて本書の撰述は、相模国大山の歌数寄な住持の需めに文明三年秋以後（本書の記述が大山の秋景を敘してゐる）のことと観られる。本書は同じ『ひとり言』とともに所伝のすくない書で、異本として神宮文庫に『苔菰』として蔵されてゐるほか、群書類従と書陵部に残存してゐるにすぎない。書陵部本は、江戸中期の書写、一面九行書き、表紙は水玉の地文に雲形を漉した半紙小本である。

老のすさび

宗 祇

救済^六・頓阿^五・宗砌^十・心敬^{十一}・智蘊^六・専順^{十一}・能阿^五・行助^三・賢盛

（宗伊）^八の名句六十五句の風躰・付合を懇切鄭重に解説し批判して、各作家の特

色傾向や風躰、付合等の変遷を指適教示し、その奥に模範的な秀逸^{八十五句}勅撰集選、
句の規準

心詞珍らしく位高からぬ二十句^{私撰集選}の作例をあげ、跋文には古今集の定家筆
句の規準

の奥書の文を引用して、宗祇の真意を代弁してゐる。探るところの句は、竹林抄からのものである。その注釈をとほして宗祇の連歌観、ひいてはその史観をうかがひうるもので、吾妻問答とともに宗祇の代表的著述である。

本書の撰述については、奥の年次宛書に「于時文明第十一曆己亥春三月日宗祇（書之）

（打田太郎左衛門尉殿）」

括弧は類
従本

とある、打田太郎左衛門尉は未詳であるが、文

明十一年春の宗祇の動静から考へて、越前国一乗谷あたりのことと思はれる。一方、尊経閣本文明十五年八月、周防国の洗竹庵宗雅筆の「老の愛」の奥に

此一帖之事、武衛浅倉弾正左衛門尉仁、宗祇禪師書出而与所也、然仁今度和尙九州下向之時、於防州山口愚老所望仕出而伝授仕訖、当代之連歌無上之句

集テ被一冊畢、仮此外代々之連歌有共、不可過之、可秘々々

と注されてゐる。これは筆者宗雅が、周防国山口で宗祇

文明十二年夏周防下向
文明十三年夏頃帰京

に直

接伝受した書本であるので信憑されうる資料である。そして先の打田太郎左衛門

尉とは越前浅倉家の家臣で、宗祇と当主弾正左衛門尉との仲介をした者であつた

らう。なほ宗雅のいふ浅倉弾正左衛門尉とは、年代に徴して五十二才の孝景

初教景
改敏景

にあたるが、年齢に参看して孝景の子氏景孫右衛門をさすものかもしれない。

用 心 抄

「惣而一座の興を催し、不催事は執筆のわざ也」とまでいはれる執筆の作法故実を注したもので、執筆の会席においての着座作法からはじめて、懷紙の折り方から句引き、懷紙の綴ぢ、座に帰るまでのことをしるしたものである。

本書の撰述年次は明瞭でないが、三千院本には巻頭目錄に「宗砌」とあり、図書寮本は諸書が合綴されたもので、その内扉に「用心抄兼載等撰之」とある。該書には、用心抄・連歌故実事・宗祇初心抄・片端（專順作）・薄花桜・連歌本式・宗伊宗祇式目・初心連歌付合の八部の集成で、そのうち編作者名の明記されてゐるのは、薄花桜、連歌本式の兼載と宗伊宗祇式目の宗伊の二書のみで、このことから内扉に「兼載等撰之」という注記がなされたものと思はれるが、本書所載の諸書が連歌故実、連歌付合以外は悉く宗祇、兼載前後のもののみであることから推して、本書撰述も、室町盛時の頃の作法であらうと考へられる。

三好長慶宛書狀

宗 養

本書は、図書寮本以外にその所伝をきかない。江戸前期の書写で、「当風連歌秘事」と合綴されてゐるものである。

その撰述については、巻初の宗養書狀と巻末の年次によつて、弘治元年八月一日に三好長慶の需めに応じて著はしたものである。長慶は人も知るように、初め範長といひ、代々管領細川家の家臣で、のち主細川を倒し、覇を近畿中国にとなへたが、わが身は遂ひに家臣松永久秀のために亡ぼされた中世期の代表的下剋上の武人であつた。時に永祿七年四月四日四十二才。内容は専ら武人、しかも守護大名級の武家の連歌会席における作法故実（主として宗牧師伝による）と連歌詠吟の心得（主として心敬の「さゝめごと」と「宗祇初心抄」による）をのべたものである。

宗養より聞書

宗 養

本書は天理図書館本以外にその所伝をきかない。該書は江戸末期の写本で一面

六行書きの半紙本。

内容は二十六個条の故実作法のほか、語義去嫌ひなど式目関係の八個条、計三十四個条からなつてゐる。その大半は、父宗牧相伝の『当風連歌秘事』の所説にもとづくもので、その間に若干の削除増補、といふよりはある時は摘要したり、敷衍したりしたもので、その引用する例句までが当風連歌秘事に一致してゐる。ただ第十三項の「連歌は宗祇の句をよく心がけて、姿てにをはを学ぶべしと也」の文が、「祇公、載公の句を常々心にかけて可学と也」となり、第十七、八項の経文連歌や字余りの文が宗牧のものより詳しく敷衍されてゐる。第二十一項の発句の項では、父宗牧と宗長の説を紹介しそれを批判してゐるが、本書でもつとも独特な宗養自身の所説は、最後の第二十六項の風体の条である。即ち宗牧は宗祇、兼載、宗長の先達の風体にふれたにすぎないが、彼は更にひろく宗砌・心敬・専順らの風躰にまで言及してゐる。

宗養は宗牧の子として生れ、初め無為、松斎と号し、若くから父に和歌連歌をならつた。天文十四年二十才の時、父の死にあひ、その後は寿慶や、同門昌休、

永閑らにたすけられ、近衛植家、三条西公条の庇護のもとに父の名跡をついで連歌界にその地位を確保しつづけた。又彼は、三好長慶、武田元信、大内義隆、尼子晴久、浅井正慶ら守護大名らと交はり、その連歌指導につとめたが、永祿六一五年十一月十八日三十八才の若さで歿した。句集としては『宗養発句集』京大図書館蔵六三年十一月十八日三十八才の若さで歿した。句集としては『宗養発句集』京大図書館蔵『宗養発句付句』『半松付句』書陵部蔵等があり、学書には、本書の他に『連歌秘袖抄』三好長慶宛、『連歌天水抄』浅井正慶宛『宗養三卷集』闇夜一灯・胸中抄・飛花落葉『宗養言塵集』武田元信宛などがあるが、その所説は父庭訓の敷衍祖述が大半で独特なものはいすくない。

紹 三 問 答

天正七一五七九年六月、関東の連歌師三甫が上洛し、細川藤孝にあつて種々指導をうけ、藤孝の紹介状をもつて、八月二十五日紹巴にはじめて面接した折の、兩人の質疑応答を問答形式に記述したものである。

内容は、はじめに三甫自身上洛して紹巴に対面するまでの経緯をしるし、「先

々貴所の発句連歌に条々不審あり、是を問侍らん、一々返答可承候」といつて、紹巴の発句付句各十二句、昌叱の発句付句二句づゝ、三甫の発句付句各一句づつ、計三十句の作例について、理に叶はぬ句、詞の本意に違ふ句、てにはの違ひ、盗作類句の類を、紹巴昌叱の句については論難攻撃し、自身の句の場合は紹巴の不理会を説き、自句に対しては「かやうの事を一字千金とはいふべし」とまで自讃してゐる。それに反し紹巴に対しては、「無言、時をうつし」とか「いかでかやうの人を天下の連歌師と云ふべきや、はづかしき事也」とまで極言してゐる。

本書には、江戸中期以降の書写本として神宮文庫本、京大研究室本、同平松本、山岸徳平、太田武夫蔵本等がある。そのうち太田本は風早実種の手沢本で、京大研究室本bG25a一冊本とともに内容的にはすぐれたものである。